

# 文末表現「Pたりして。」の一考察

—認識的モダリティの観点から—

廉美蘭\*

(e-mail : ymr5513@hotmail.com)

## < 목 차 >

- |                 |                          |
|-----------------|--------------------------|
| 1.はじめに          | 4. 「Pたりして。」のモダリティ性       |
| 2. 先行研究         | 4.1. モダリティの捉え方           |
| 3. 「Pたりして。」文の意味 | 4.2. モダリティ観点に基づく「Pたりして。」 |
|                 | 5. 結論及び今後の課題             |

キーワード：認識的モダリティ(epistemic modality)、Pたりして(P-TARISITE)、可能性判断(decision on passibility)、冗談用法(joke method)、文末表現(sentence ending)

## 1.はじめに

一般的に「たり」は、例文1)のように、「雪がふる」、「日差しが強い」という異なる事態を並びあげる「列挙」や例文2)のように「どなる」と同類の事柄があったことを「暗示」する副助詞的用法<sup>1)</sup>を持つと知られている。

### 1) (20代女性の会話<sup>2)</sup>)

A：暑いのと寒いのが苦手なんで、

B：あー。

A：雪ふったり、日差しが強かったりすると、あんまり外、出たくないですよ ね <笑いなが

\* 全州大学 講師、日本語学

1) 『大辞林 第三版』(三省堂)で「たり」用法の解説を参考。

2) 山内(2015:86)、BTSJ(Basic Transcription System for Japanese)による日本語話し言葉コーパス(ドランスクリプト・音声)2011年版

ら〉(山内 2015:86)

2) さっきは、しんのすけにどなたりして、悪い父親だ。白井儀人『クレヨンしんちゃん』

森山(1997:60)

一見、「たり＝複数の事態」という意味関係が成立するように思われる。ところが、森山(1995)(1997)は、文末に現れる「たりして」には、3)のように、「冗談用法」があると述べ、従来の意味と異なる性質があることを指摘している。また、文末に単独使用される「たりして」は、いつも冗談用法を表すものではなく、4)のように「事件かもしれない」という「可能性」を表す場合も存在する。

3) [うどんを食べるときに、テーブルの上にマヨネーズがあるのを見て、冗談で]

うどんにマヨネーズをかけたりして。

森山(1995) : 140

4) あれえ、ヘリが何機も上空を旋回している。事件だたりして。<sup>3)</sup>

京(2013)は、文末に単独使用される「たりして」を「Pたりして。」と表記し、5)、6)のように、確からしさが低いという意味で「かもしれない」と「Pたりして。」が同様であり、モダリティと関連することを言及している。

5) あの偉そうにしている人、ひょっとして、この社長かもしれないね。

6) あの偉そうにしている人、ひょっとして、この社長だたりしてね。 京(2013 : 37)

本稿においても文末に単独使用される「たりして」を、表記の便宜上、京(2013)の「Pたりして。」を借用する。「Pたりして。」は、「たり」の意味考察の流れで比較的在最近取り上げられたものであって、関連研究はほとんど見当たらない。そこで、本稿では、文末に位置する「Pたりして。」を研究対象とし、一部列挙、暗示、可能性、冗談などの意味を先行研究とともに意味の考察を行いたいと思う。特に、京(2013)で言及したモダリティとの関連性をより具体的に検証し、文法的に「Pたりして。」がどのように位置づけられるか試みたい。

3) <https://forum.wordreference.com/threads/%E3%81%9F%E3%82%8A%E3%81%97%E3%81%A6.2836004>/ブログ引用。

## 2. 先行研究

「～したり～したり」「～するとか～するとか」のような並列関係については、寺村(1991)4)に遡るが、以降、森山(1995)(1997)は事態の捉え方を基に並列述語構文を〈表1〉のようにまとめた。

〈表1〉 並列述語構文の並列関係と例の挙げ方5)

	候補的並列	結合的並列	交差的並列
一部列挙	～とか～とかする なり なり	～たり～たりする	～し～
全部列挙	～か～かする		テ形の並立

「たり」は結合的關係であるので、1)の「雪がふる」、「日差しが強い」という矛盾する事態が結合可能であり、事態が複数あることを前提するので事態の時空が違う解釈も可能だという。また、2)のように「どなった」が問題になっていて、「悪い」という質を問題とする文では、一部列挙の意味が異質なものになると述べている。7)と比較してみると、「たり」の質的用法と一般的一部列挙用法の違いが明確になる。2)の暗示の意味は、この質的用法の一つとして考えられる。

7) きょうは、しんのすけにどなったりして、一日が過ぎた。 森山(1995:138)

森山(1995)(1997)の研究で最も興味深いところは、3)の「たりして」を「冗談用法」を表す特殊な形式として捉えている点である。

3) [うどんを食べるときに、テーブルの上にマヨネーズがあるのを見て、冗談で]  
うどんにマヨネーズをかけたりして。 森山(1995)：140

「たり」構文があることによって、「うどんにマヨネーズをかける」ことだけを取り上げて問題にするのではないという意味になり、次のような解釈ができると説明している。

4) 並列関係を体系的に取り上げられた先駆的研究は寺村(1991)である。寺村秀夫(1991)『日本語のシンタクスと意味Ⅲ』くろしお出版。森山(1995:127)再引用。

5) 表のタイトルは筆者が作名したもの。AとB(全部列挙型)/AやB(一部列挙型)という並列パタンの違いと基本的に同様である。森山(1997:58～59)

「よりによって～」という極端な事態の在り方を一例として提示することになるのである。こう考えれば、ここでの「冗談」とは、極端な異常事態を例示・想定することとして位置づけられよう。(中略)あくまで例であって、そのことだけを大まじめで(?)考えているのではないという意味が生ずる余地ができるのである。 森山(1997:61)

一方、大和(2008)は、「たり」の質的用法以外に対照的なものを暗示すると主張し、8)、9)のように想定通りの当たり前の事態ではなく、話者の想定から外れた意外性を持つ有標<sup>6)</sup>の事態を表すとしている。

- 8) 料理の得意な花子は、玉子焼きがうまくつくれなかったりする。  
9) 料理の得意な花子は、玉子焼きがうまくつくれたりする (?)

さらに、10)のような依頼の文脈で現れる「たり」を中心に無標の事態をまるで意外なことであるかのように示し、ネガティブフェイス<sup>7)</sup>に対しての対人配慮効果をもたらす形式であると考えた。例えば、(相手が)依頼を受け入れることを、(話し手が)当たり前だと思っていないと相手に示すことによって配慮を表すことができるとしている。

- 10) [休んだ授業の課題レポートを書くため友人に依頼する場面で]  
参考文献を教えてもらえたりしたら嬉しいな。 大和(2008:115)

本多(2007)においても「意外と感じられる事態」という用語が登場する。ここでは認知意味論<sup>8)</sup>の観点から「たりする」の全体的意味を〈事態生起の必然性の欠如〉から考える。11a)、11b)のような経路によって様々な用法が成立するとした。

- 11a) 事態生起の必然性の欠如  
→ 話し手の側での、〈生起の必然性がない事態〉としての認識：

6) 大和(2008:120)は、有標の事態がタリでマークされていると考えている。例[新しいアルバムについてのインタビューの中で]気楽にやったように聴こえるほど、実は一生懸命だったたりするんです。(ケツメイン)→[有標:一生懸命やった][無標:気楽にやった] 大和(2008:120)  
7) ネガティブフェイスとは、自己の領域を邪魔されたくない、行動の自由を守りたいという欲求で、ポジティブフェイスとは、他者に受け入れられたい、認められたいという欲求である。大和(2008:116)  
8) 言語表現の意味を支持対称とみなすのではなく、対象に対する話し手の理解ないし概念化の仕方(あるいは捉え方)または概念化のプロセスそのもの(conceptualization)と考える立場である。本多(2007:10~11)

確信が持てない事態、思いつき、生起の可能性があると感じられる事態、意外と感じられる事態、不都合・受け入れ困難と感じられる事態、(その外)

11b) 事態生起の必然性の欠如

→ 話し手の側での、〈生起の必然性がない事態〉としての認識・提示：  
緩衝効果

12)の「たりして」について、話し手が必然性がないと認識し、それを相手に提示(気づいていない、知らないなど)することによって、聞き手のショックを和らげる緩衝効果が生まれると捉えている。

12) この話、実は全部うそだたりして。 本多(2007:8)

本多(2007)の生起の必然性がない事態として認識—提示という見解は、京(2013)と類似している。京(2013)は、「Pたりして。」を「仮想的事態提示形式」とし、その特徴を次のように示している。話し手が事態を仮想する—提示するという経路が読み取れる。

- ・ある事態を仮想し、それを提示するものであること。
- ・提示されるところの事態は、その実現の可能性が非常に低いものであること。

京(2013:35)

ここでまた「冗談用法」に戻ることになるが、京(2013)は、13)の「冗談用法」について、「記念写真を撮る」事態を「異常事態」と取り上げているものではなく、「撮影禁止区域」という状況に於いての行為を「Pたりして。」形式で表現していると考えている。「～たりして」という表現形式をとる<sup>9)</sup>ことと深く関わっていると述べた。

13) [撮影禁止区域で、(冗談で)]

ここで記念写真撮ったりして。 京(2013:32)

京(2013)の考察は次の三つにまとめられる。①「案外」「もしかしたら」「意外と」

9) 「Pたりして。」では、「ありそうもない事態」「極端な異常事態」という性格を有すると思われる事態が述べられているが、そういった評価性が存することについて、これは提示される事態そのものの性格というよりは、むしろ、「～たりして」という表現形式をとることが深くかかわっているのではないかと思う。京(2013:33)

「まさか」という副詞表現との共起可能[例14]、②「連用形て+は」＝「たりして+は」を同様であるとみて、「～たりして－は－否定的評価語」という表現形式をベースにする[例15]、③「かもしれない」は発話者自身が事態についてあり得るものとの認識を持っている一方、「Pたりして。」はあり得ないと考えている事態を提示する[例5、6]。

- 14) (浮ついた噂を)案外自分で一生懸命流したりして。男装して自分のアパートに入るところを友達にフォーカスしてもらったりして。荻野アンナ『背負い水』 森山(1997:56)
- 15) 次に困ったことが、撮りたいバイクがいつ来るかわからない!!! (中略)でも時々違うバイクを撮って/たりして、困ったチャンです。 京(2013:36)

また、山内(2015)は、自然会話データ100人分を用いて「たり」の類型別出現数<sup>10)</sup>を考察している。ここでは、並列使用より単独使用が非常に多く表れること、文末の「たりして」「たりとかして」は意外で希有な事態や側面、多くは笑いを伴って使用されると分析している。以上の先行研究をまとめると〈表2〉のようである。

〈表2〉先行研究のまとめ

研究者	研究の観点	文中・文末単得使用「たり(して)」の意味・用法
森(1995)(1997)	文法論	質的用法、冗談用法「Pたりして。」
大和(2008)	対人配慮論	質的・対照的暗示 : ネガティブフェイス
本多(2007)	認知意味論	生起の必然性がないと認識・提示: 緩衝効果
京(2013)	文法論	仮想的事態表示形式「Pたりして。」 : あり得ないと考えている事態を提示
山内(2015)	自然会話データ分析	文末単独使用「たりして」「たりとかして」 : 希有な事態、側面、笑いを伴う

ところが、森山(1995)(1997)が一般的な一部列举と異なる特殊な用法として指摘しているのは[うどんにマヨネーズをかけたりして]という「Pたりして。」文であるにも関わらず、以降の研究では文中の「たり(して)」と「Pたりして。」を含めた考察が行われたため、意味・

10) 100人の会話における「たり」のトークン数 ※( )の数値は全トークン数に占める割合

並列使用	単独使用	全トークン数
54(20.4%)	211(79.6%)	265
	a) たり (146トークン)	
	b) たりとか (39トークン)	
	c) たりして、たりとかして(26トークン)	

山内(2015:86~87)の内容を要約したもの。

用法がやや抽象的になってしまった印象を受ける。

次章では本章で検討した先行研究を参考して、形態的には「Pたりして。」を、意味的には「かもしれない」の可能性判断との対照を中心に考察を行う。

### 3. 「Pたりして。」文の意味

本章では、上でみてきた例文を意味別に大きく三つに分けて検討してみる。

一、「Pたりして、Q」のような構造で現れ、質的用法を有する。「どなる」と同類の行動が暗示されることではなく、「どなってはいけないのに」のように質的用法として挙げられたものである。15)についても「違うバイクの写真を撮っては困るのに」という一部列挙と異なる異質的想定が考えられる。

2'11) さっきは、しんのすけにどなったりして、悪い父親だ。

15') 次に困ったことが、撮りたいバイクがいつ来るかわからない!!! (中略)でも時々違うバイクを撮って/たりして、困ったチャンです。

二、可能性判断の「Pたりして。」形式である。4)の「へりが何機も上空を旋回する」、6)の「あの偉そうにしている人」という発話状況の下で、話し手が「事件」や「この社長」であると想定する、またはその可能性があると認識していることが表されている。上でみた「Pたりして、Q」の質的用法とは異なる。

4') あれえ、へりが何機も上空を旋回している。事件だったりして。

6') あの偉そうにしている人、ひょっとして、この社長だったりしてね。

京(2013)は、確からしさが低い意味で、可能性把握の「かもしれない」と同様の意味を有すると言いながら、「かもしれない」文は事態生起の可能性が低いものとしつつも、当人はありうると捉えているのに対して、「Pたりして。」文は通常起こりえないことであると捉えている点で二者の意味が異なると主張している。

11) 例文の重複使用は「'」「''」などで表記する。

ところが、4)、6)を、16)、5)のように「かもしれない」文に置き換えて考えると、あり得ると考える、起こりえないと考えるのような違いで説明し難くなる。むしろ、両方とも可能性判断として同様であると考えられる。

- 16) あれえ、へりが何機も上空を旋回している。事件かもしれない。  
5') あの偉そうにしている人、ひょっとして、この社長かもしれないね。

ここで可能性判断について簡単に触れておく。三宅(1992)<sup>12)</sup>は、可能性判断を認知的モダリティの一種とみて、次のように定義している。

可能性判断 : 命題が真である可能性があると認識する。 三宅(1992:38)

そして、可能性の認識がある場合に(一つの可能性として)命題が真であるか、いかなる場合でも(総ての可能性として)命題が真であるかに分け、前者を可能性判断、後者を断定とし、「かもしれない」は前者に当たると述べている。さらに、「かもしれない」文は、17)のように話し手の信念<sup>13)</sup>に関わる場合でも、18)のように同時に真であり得ない命題を並べる場合でも用いられる。

- 17) それはうそカモシレナイが、私は本当だと思う。 三宅(1992:41)  
18) 「どのくらい?」「決めていないんだ。意外と長くなるかもしれない。半年になるかもしれないし、一年になるかもしれない……」 (一瞬) 三宅(1992:40)

では、「Pたりして。」の可能性判断はどうだろうか。「かもしれない」と対照してみる。

「Pたりして。」は、16)、5)で確認したように一般的可能性判断に接続可能であり、19)のように話し手の信念と関わる場合でも「かもしれない」と同様に接続可能である。しかし、20)、21)のように同時に真であり得ない命題を並べる場合には「Pたりして。」は接続不可能である。

12) 従来の研究で、カモシレナイ意味を、二チガイナイ、ダロウなどと比べて、相対的に蓋然性が低いというふうの説明しようとする考え方を批判する立場をとっている。三宅(1992:37~38)

13) 可能性判断は、話し手の信念とは別物であると思われる。例文20)のような場合もある一方、それが真であることを信念の中に入れてたくないような命題についても可能性判断はなされることがある。例)もしかしたら肺病かもしれない。わたしはひそかに覚悟していた(道あ) 三宅(1992:40~41)

- 19) 私は本当だと思うが、それはうそだたりして。(○)
- 20) 事件だたりして。事件じゃなかたりして。(?)
- 21) この社長だたりして。あそこの社長だたりして。(?)

このような接続関係から、話し手が可能性判断を行うには、発話状況からP<sub>1</sub> P<sub>2</sub> P<sub>3</sub> …など、いくつかの事態の中で一つの可能性を取り上げなければならない。「かもしれない」と「Pたりして。」は、その大まかなプロセスとしては同類であることが予想できる。

「かもしれない」は「Pである」という可能性だけではなく「Pではない」可能性も示している。18)のようにP<sub>1</sub> P<sub>2</sub> を取り上げる場合でも事件かもしれないし、事件ではないかもしれないという矛盾する事態でも用いることができる。

一方、「Pたりして。」は、20)、21)のような制限される現象をみると、「かもしれない」と違って話し手が認識する一つの可能性を示す形式と考えられる。一つの可能性ということについては、発話状況とP<sub>1</sub> P<sub>2</sub> P<sub>3</sub> …の関係、話し手が発話に持ち込む意図や態度など、より詳しい考察が必要であるが、先行研究で記述された「事態生起の必然性がない」「あり得ないと考える」「希有な事態」「冗談」という用語を参考すると、発話状況とP<sub>1</sub> P<sub>2</sub> P<sub>3</sub> …の関係は、通常なら考えにくい極端な事態を取り上げることはなかろうか。例えば、4)で「ヘリが何機か上空を旋回する」状況から「事件」だと考えたり、6)で「偉そうにしている人」を見て「この社長」と考えることは、話し手が可能性として認識するP<sub>1</sub> P<sub>2</sub> P<sub>3</sub> …の中で最も極端な、あるいは可能性の低い候補を取り上げるのではないかと考える。とはいえ、22)のように取り上げた事態がいつも起こってほしくない、好ましくない事態とは限らない。

- 22) 普段何気なく通り過ぎている場所でも、図書館とかでよくよく調べてみると意外な有名人がやって来てたりするんだよ<sup>14)</sup> 本多(2007:6)

三、3)、13)、14)の「冗談用法」と呼ばれる「Pたりして。」文について考察しよう。

- 3') うどんにマヨネーズをかけたりして。
- 13') ここで記念写真撮たりして。

14) 例文では「たりする」形式であり、「意外な有名人がやってくる」という事態が可能性ではなく、事実のように語る表現になっている。この文を「意外な有名人がやってきました。」のように「Pたりして。」文に替えると、「有名人がやってくる」可能性を表す表現になる。

14') (浮ついた噂を)案外自分で一生懸命流したりして。男装して自分のアパートに入るところを友達にフォーカスしてもらったりして。

以上の例文を、事態の生起可能性と話し手の可能性判断という二つに分けて考えてみよう。まず、一般的にはうどんにマヨネーズをかけない、撮影禁止区域で記念写真を撮ってはいけない、通常自分の噂を自分で流し、男装して自分のアパートに入るところを友達にフォーカスしてもらうことはしないなど、発話状況上、事態の生起可能性は非常に低く、通常なら生起しないような事態である。

このような状況にも関わらず、話し手はあえて「たりして」を用いて、うどんにマヨネーズをかける、撮影禁止区域で記念写真を撮る、自分の噂を自分で流し、男装して自分のアパートに入るところを友達にフォーカスしてもらうなど、話し手が通常なら生起しない事態を取り上げて、生起し得る可能性判断として提示する。

この場合、発話状況と  $P_1$   $P_2$   $P_3$  … の関係をみると、通常なら生起しないような事態を生起し得る可能性として取り上げているわけなので、発話場面でそのギャップが明確に現れる。これは話し手の立場からすると、そのギャップをアピールして発話意図を示すことになり、聞き手の立場からすると、そのギャップによって意外性、希有な事態、あり得ない、冗談などの意味が読み取れることになる。つまり、「Pたりして。」形式そのものが「冗談」の意味を持つわけではなく、極端な例の一つの可能性という意味が事態と文脈などの複合的環境<sup>15)</sup>によって生まれると考えられる。

もう一つ、話し手のストラテジーの側面から考える必要がある。話し手が話しの途中で心理的距離を縮めたい、その場を和やかにしたいとき、「冗談」は、ポジティブ・ポライトネス<sup>16)</sup>として機能するからである。確かに、冗談の意味を表す「Pたりして。」は初対面や知らない人に言えないし、丁寧な言い方でも表現できない。即ち、冗談用法と呼ばれる「Pたりして。」は、話し手が円満なコミュニケーションを進めるために意図的に用いられたと考えられる。本稿ではポライトネスについては詳しくみないが、依頼文に現れる「たり」をネガティブフェイスに対する対人配慮効果と説明している大和(2008)の考察と比較してみると興味深

15) 日本語は話し手・文脈にかかわる情報が文の内部構造に高度に組み込まれるという意味において、話し手依存性・文脈依存性の高い言語である。「文＝事態成分＋話し手・文脈関係成分」という文構造の把握が生まれるとした。益岡(2007:249)

16) ポジティブ・フェイス：1)相手に理解されたい 2)称賛されたい 3)好かれたい/冗談や仲間内の言葉はお互いの距離を縮めたい思いがあることから認知主体(話し手・聞き手)がポジティブ・ポライトネスを使用する。金杉(2008:52)

いとこである。

本節の内容は次のようにまとめられる。

- i) 「Pたりして、Q」：質的用法(一部列挙とは異なる異質的性質)
- ii) 「Pたりして。」：可能性判断(極端な例の一つの可能性)
- iii) 「Pたりして。」：冗談用法(極端な例の一つの可能性、話し手のストラテジー)

考察の結果、「Pたりして。」の可能性と冗談用法という意味は、可能性判断という概念から極端な例の一つの可能性を表すものと考えられる。

## 4. 「Pたりして。」のモダリティ性

「Pたりして。」は、可能性判断を表す「かもしれない」と意味的に類似しているところが多い。「かもしれない」は認識的モダリティの下位類の中、可能性判断表現の典型的形式と知られている。先行研究からもモダリティとの関連性が示唆されていたが、実際、京(2013)以外の研究は管見の限り見当たらなかった。4.1では益岡(2006)<sup>17)</sup>(2007)のモダリティ理論を概観し、4.2では、それに基づいて「Pたりして。」のモダリティ性を観察してみる。

### 4.1 モダリティの捉え方

益岡(2007)は、[客観的な事態(命題)+主観的な態度(モダリティ)]という文の意味的構成を基盤とする構成的モダリティを捉えており、表3)のような意味的階層構造を形成すると述べる。

表3) 文の意味的階層構造 益岡(2006)

<p>【ねえ、[どうやら[昨夜[激しく雪が降っ]た]ようだ]よ。]<sup>18)</sup></p>
<ul style="list-style-type: none"> <li>・ [激しく雪が降る]：一般事態(事態の中核)</li> <li>・ [昨夜-た]：個別事態(一般事態が位置する時空間)</li> <li>・ [どうやら-ようだ]：判断のモダリティ(話し手の判断)</li> <li>・ [ねえ-よ]：発話のモダリティ(話し手の表現・伝達態度)</li> </ul>

17) 仁田外(2005)の中、益岡が掲載した部分を参照。pp.144~147.

18) 一般事態の領域を個別事態の領域が包含し、それを判断のモダリティの領域が包含し、さらにそれを発話モダリティの領域が包含する。益岡(2006: 145)

さらに、判断のモダリティは真偽判断のモダリティと価値判断のモダリティに二分されるしたが、「べきだ」「ればよい」「てもよい」「ほうがよい」など、[現実像－理想像]という対立関係による価値判断のモダリティは本稿では論外にするので真偽判断のモダリティを中心に検討してみる。

益岡(2007)は、真偽判断のモダリティ体系について、述語の無標形式による「断定」と有標形式による「非断定」の立場からなり、非断定の判断は、[定判断(断定こそできないが何らかの判断は下す)－不定判断(真偽の判断が全く下せない)]に大別され、定判断には「断定保留」「蓋然性判断」「証拠性判断」「当然性判断」という下位類があると示した。これは〈表4〉のようにまとめられる。

〈表4〉 益岡(2007)の真偽判断のモダリティ体系

真偽判断もモダリティ(「認知的モダリティ」と呼ばれることが多い)					
断定 (無標形式)	非断定 (有標形式)				
	定判断				不定判断
	断定保留	蓋然性判断	証拠性判断	当然性判断	
[Ø]	だろう たろう ～(よ)う まい など	かもしれない にちがいない	ようだ (及び「みたいだ」) らしい そうだ という	はずだ	かな かしら か など

モダリティの体系は、仁田(2013)では、言表事態のモダリティと発話・伝達のモダリティに客体的モダリティ<sup>19)</sup>を新規に追加され、三分類するなど、論者によりかなり異なる<sup>20)</sup>。

ところが、モダリティの上位概念は、[現実(世界)－非現実(世界)]、[確実－不確実]、[事実－非事実]<sup>21)</sup>の'realis vs irrealis'という対立関係に基づいており、モダリティ研究では「事態の現実性」<sup>22)</sup>が決定的に作用されることに共通点がみられる。

益岡(2007)は、断定について、現実において当該の事態が真であると認定するもの(「現

19) 具体的には「しかねない」「しないと限らない」などの可能性表現、「しかちだ」「しにくい」などの傾向性表現、「するつもりだ」「してみせる」などの意図性表現、「したい」「してほしい」などの願望性表現である。竹林(2015:19)

20) 使用される名称からして〈モダリティ〉〈叙法(性)〉などと異なっている。捉え方の異なり方を受け、扱い方を含め、モダリティとして扱われる内実も、また異なっている。仁田 外(2006:136)

21) 先行研究の中でも益岡(2007)は現実－非現実、赤塚は事実－非事実(益岡2007:141再引用)、国澤(2015)は確実－不確実、黒滝は現実世界、非現実世界(国澤2015:24)再引用)など、様々である。

22) 真偽判断のモダリティと価値判断のモダリティ、両者には「事態の現実性」が決定的にかかわると述べている。益岡(2007:135)

実」(‘realis’)の領域に属するという判断)であるし、非断定についてはあり得る事態として思い描くこと(現実の外にある「非現実」(‘irrealis’)の領域に属するという判断)であると定義している。用語の問題ではあるが、これに関連する研究では、話し手が事態をどのように捉えて表現するかの問題なので、真偽判断という用語より認識のモダリティ、あるいは認識的モダリティと称する場合が多い。本稿でも認識的モダリティと呼ぶことにする。

前章で言及した可能性判断の「かもしれない」は、益岡(2007)の〈表4〉の分類を参照すると、非断定—一定判断—蓋然性判断—可能性判断という意味関係が成り立つことで認識的モダリティとして位置づけられると考えられる。一方、可能性判断の意味で「かもしれない」と類似していると思われる「Pたりして。」はどうだろうか。二者の性質が類似していることを主張するためには3章で考察した可能性判断という意味だけではなく、「Pたりして。」を認識的モダリティと認められるモダリティ性を検証しなければならない。

益岡(2006)は、モダリティを位置づけようとするとき話題にすべき重要な事項について意味面における主観性の問題、形式面における線状化の問題の二点を挙げている。つまり、概念的に主観的なものが即モダリティとみなされるわけではなく、「客観的事態(命題)vs主観的態度(モダリティ)」という基本的構図、文の意味的階層構造に基づく配列も念頭に置かなければならない。

## 4.2 モダリティ観点に基づく「Pたりして。」

以上の考察内容に基づいて、本節では「Pたりして。」のモダリティ性を検証する。まず、表3)の文の意味的階層構造から検討してみる。これは個別事態の領域が一般事態の領域を包含し、判断のモダリティの領域が個別事態の領域・一般事態の領域を包含し、発話のモダリティの領域が判断のモダリティの領域・個別事態の領域・一般事態の領域を包含することを示す<sup>23)</sup>。「Pたりして。」は、5)の「かもしれない」と同様に、6)の「ひょっとして」、15)の「案外」など、確からしさの低い意味を表す副詞<sup>24)</sup>と共起し、[ひょっとして～たりして]、[案外～たりして]の構造で用いられる。

5') あの偉そうにしている人、ひょっとして、ここの社長かもしれないね。

6') あの偉そうにしている人、ひょっとして、ここの社長だたりしてね。

23) 益岡(2007:3)

24) 「案外」、「もしかしたら」「意外と」「まさか」という副詞表現との共起からみて、可能性の低い事態を想定していると見てよさそうに思う。京(2013:34)

14') (浮ついた噂を)案外自分で一生懸命流したりして。男装して自分のアパートに入る  
ところを友達にフォーカスしてもらったりして。

また、多くの例は見つからなかったが、6)のように終助詞「ね」が後接することが可能である。終助詞「ね」は益岡(2007)の分類によると、発話モダリティの下位類である対話態度のモダリティに入るので、意味的階層構造上、「かもしれない」と同様の位置づけが可能であると考えられる。

もっと具体的には、「かもしれない」と「可能性がある」二者を対照している益岡(2007)の考察を参照されたい。まず、「可能性がある」表現については「可能性がある」という組成のままの意味が表され、意味的に透明である点、質問や否定の形を取る点、文末に位置する場合断定を表す点を挙げ、文法形式化の度合いが低いと主張する。一方、「かもしれない」表現は「か+も+しれない」という組成であるが、単純にその意味が表されず意味的な透明性が低い点(「かも」という短縮表現が可能)、質問や否定の形を取り得ない点、文末に位置する場合非断定を表す点を挙げ、モダリティ表現として文法形式化の度合いが高いと主張する。特に、23)の「かもしれない」を「断定の緩和」と捉え、認識的モダリティ(真偽判断のモダリティ)の性格を持つことに因るとした。そこで、「可能性がある」と「かもしれない」二者はモダリティ表現か否かで異なると主張する。

23) 次のように断言してよいかもしれない。益岡(2007:192)

「可能性がある」と「かもしれない」を対照した内容は〈表5〉のようにまとめられる。

〈表5<sup>25)</sup>〉 「可能性がある」と「かもしれない」モダリティ性の対照

対照項目	可能性がある	かもしれない
組成	可能性+が+ある	か+も+しれ+ない
文法形式の独立化	意味的に透明、独立の文法形式として確立していると言い難い	比較的に入法形式化の度合いは高い(「かも」短縮表現可能)
疑問・否定形接続	例) 可能性はあるか。(○) 例) 可能性はない。(○)	例) かもしれないか (?) 例) かもしれなく(は)ない (?)
語彙的表現	事実としてコメントする色彩が強い 事態のあり方を述べるレベル	事態に対する真偽判断の一つである 可能性判断を表す (一定程度文法化)
文末表現	断定表現	非断定表現
「断定の緩和」表現	ない	ある
モダリティ性	モダリティの表現ではない	認識的モダリティの性格

では、これに対して「Pたりして。」はどのように対応しているのか観察してみよう。「Pたりして。」は、「たり+して」の組成であり、3章でまとめたように一部列挙、暗示、質的用法、冗談用法などがある。これをモダリティの[現実－非現実]という対立関係から考えると、「Pたりして。」は非現実世界の可能性判断を表す反面、8)の「Pたりする」、15)の「Pたりして、Q」のような形式は、「玉子焼きがうまく作れない」、「違うバイクを撮る」という事態は現実の世界で行われた意味を表す。つまり、「Pたりして。」は、「たり+して」の組成に因る意味の透明性は低いといえるが、可能性判断の意味として独立していると考えられる。

8') 料理の得意な花子は、玉子焼きがうまくつれなかつたりする。

15') 次に困ったことが、撮りたいバイクがいつ来るかわからない!!! (中略)でも時々違うバイクを撮って/たりして、困ったチャンです。

また、「Pたりして。」は、24)、25)のように質問や否定の形を取り得ないし、26)のように丁寧の形でも制限がみられる。これは可能性判断、とりわけ極端な例の一つの可能性を表す形式として、文法的に「Pたりして。」が固定されたと考えられる。

24) この話、実は全部うそだつたりしてか。(?)

25) この話、実は全部うそだつたりして(い)ない。(?)

26) この話、実は全部うそだつたりして(い)ます。(?)

次は「Pたりして。」の文末表現について考えてみる。「かもしれない」は、文中、文末に関わらず、話し手の可能性判断として自由に現れるが、「Pたりして。」は常に文末に位置し、非断定の意味を表す。この非断定とは、前章で考察した内容を総合してみると、発話で可能性判断や冗談用法として現れるもので、極端な例の一つの可能性という意味が含まれていると想定できる。この非断定表現は、27)のように「断言する」26)に「たりして」が接続し、断言の緩和の意味も表すことができるので、益岡(2007)の判定に従うと「Pたりして。」にも認知的モダリティの性格が存在すると考えられる。

25) 益岡(2007:190~192)の内容を筆者がまとめて表で作成したもの。

26) 「断言する」に「かもしれない」が接続する場合は判断の主体は話し手にならない。23)は、価値判断のモダリティに属する「～もいい」に「かもしれない」が接続した場合である。一方、「Pたりして。」の断言の緩和表現は、「断言する」にしか接続可能であり、「断言してよかつたりして」のような表現は不自然である。

27) 為替は円高へ移行します。なんて、断言したりして。27)

以上、「Pたりして。」のモダリティ性について「かもしれない」と対照してみたが、内容をまとめると〈表6〉のようになる。

〈表6〉「Pたりして。」のモダリティ性

項目	「Pたりして。」
組成	たり+して
文法形式の独立化	組成に因る意味の透明性は低いが、可能性判断として独立している
疑問・否定形接続	例) この話、実は全部うそ <u>だ</u> たりしてか。(?) 例) この話、実は全部うそ <u>だ</u> たりして(い)ない。(?)
丁寧形接続	例) この話、実は全部うそ <u>だ</u> たりして(い)ます(?)
文末表現	非断定表現
「断定の緩和」表現	ある
語彙的表現	極端な事態を一つの可能性判断として表す、文法形式化の度合いが高い
モダリティ性	認識的モダリティの性格

## 5. 結論及び今後の課題

本稿では、日本語の並列助詞「たり」と「して」が結合したとみられる「たりして」、特に文末に単独使用される「Pたりして。」の意味について考察した。

2章の先行研究では、「たり」について文法論、対人配慮論、認知意味論など、様々な観点に基づく考察を観察したが、「Pたりして。」には本来の意味以外に質的用法、冗談用法、仮想的事態を示すなど、やや特殊の意味が存在することを確認した。〈表2〉で内容をまとめている。

3章では、先行研究で取り上げた例文を「Pたりして、Q」と「Pたりして。」形式に分けて、意味別に一部列挙とは異なる異質的性質を持つ質的用法、可能性判断、冗談用法の三つに分けられると指摘している。特に、可能性判断については、発話状況からいくつかの事態 $P_1$   $P_2$   $P_3$  …の中で一つの可能性を取り上るというプロセスは「かもしれない」と「Pたりして。」が同様であると考え、発話状況と $P_1$   $P_2$   $P_3$  …の関係、発話意図に基づいて詳しく考察している。その結果、i)「Pたりして、Q」は質的用法(一部列挙とは異

27) <https://ameblo.jp/fukuyamashow/entry-12429111460.html> ブログ引用

なる異質的性質)、ii)「Pたりして。」は可能性判断(極端な例の一つの可能性)、iii)「Pたりして。」は冗談用法(極端な例の一つの可能性、話し手のストラテジー)のようにまとめられるとした。

4章では、益岡(2007)のモダリティの捉え方を取り入れて「Pたりして。」形式のモダリティ性を検証した。その結果、i)「たり+して」の組成に因る意味の透明性が低いが可能判断として独立している、ii)疑問・否定・丁寧の形を取り得ない、iii)文末に位置する場合は非断定表現で現れる、iv)断定の緩和表現を持っている、v)極端な事態を一つの可能性判断として表し、文法形式化の度合いが高い、以上の内容を総合した上で「Pたりして。」は認知的モダリティの性質を持っていると想定できると主張した。その内容を〈表6〉でまとめている。

以上の考察の結果、「Pたりして。」形式は認知的モダリティ「かもしれない」と同様の性質を持ちながら、意味的には極端な例の一つの可能性を表し、形態的には疑問、否定、丁寧の形を取り得ない、文法形式化の度合いが高い表現であることが確認できた。つまり、「Pたりして。」を認知的モダリティとして一つの文末表現をなしていると考えることができる。今後、「Pたりして。」が一つの文末形式として文法化しつつある現象についてより詳しい考察を続けたいと思う。

## 【参考文献】

- 金杉高雄(2008)「言語ストラテジーの役割」『太成学院大学紀要』10巻、pp.49-62.  
(DOI:10.20689/taiseikiyou.10.0\_49)
- 京健治(2013)「現代語に於ける並列助詞「たり」の一用法-仮的事態提示形式「たりして」-」『文献探求』51、pp.41-32.
- 国澤里美(2014)「現代日本語における『認識のモダリティ』-世代差が生じる要因-」博士学位論文、名古屋大学
- 竹林一志(2015)「仁田モダリティ論の変遷とゆくえ」『総合文化研究』第21巻、2号、pp.17-28.
- 仁田義雄、大鹿薫久、工藤浩、益岡隆志(2006)「モダリティをどう捉えるか」『日本語学会2005年度春季大会シンポジウム報告』2巻1号、pp.136-147.DOI:10.20666/nihongonokenkyu.2.1\_136)
- 福田一雄(2014)「日本語モダリティ覚え書き(その一) Notes on Japanese Modality(1)」『言語の普遍性と個性』新潟大学大学院、Vol.5、pp.1-15.
- 本多啓(2007)「副助詞タリの用法」『駿河台大学論叢』33号、pp.1-18.  
(DOI:info:doi/10.15004/00001036)
- 三宅知宏(1992)「認識的モダリティにおける可能性判断について」『待兼山論叢日本学篇』26、pp.35-47.
- 益岡隆志(2007)『日本語モダリティ探求』くろしお出版

- 森山卓郎(1995)「並列述語構文考-『たり』『とか』『か』『なり』の意味用法をめぐって-」『複文の研究(仁田義雄編)』くろしお出版.
- \_\_\_\_\_ (1997)「うどんにマヨネーズかけたりして」-並立の意味『週刊言語』Vol.26(2), pp56-61.
- 山内美穂(2015)「会話で「単独使用」される「たり」-なぜ「たり」で「可能性」や「意外性」が表せるのか-」『日本語教育』第162号、pp.82-96. (DOI:10.20721/nihongokyoiku.162.0\_82)
- 大和啓子(2008)「～たり(スル)」の意外性と配慮効果：依頼文脈における使用を中心に」『筑波大学大学院博士課程文芸・言語研究科応用言語学コース』Vol.16、pp.115-125.

논문 투고 일자 : 2019. 03. 30.
논문 심사 일자 : 2019. 05. 03.
게재 확정 일자 : 2019. 05. 07.

＜要旨＞

文末表現「Pたりして。」の一考察  
 — 認知的モダリティの観点から —

廉美蘭

本稿は、日本語の並列助詞「たり」と「して」が結合したとみられる「たりして」、特に文末に単独使用される「Pたりして。」の意味について考察した。特に、モダリティの観点から意味的な位置づけを試みたものである。先行研究を通じて、本来の意味である一部列挙や暗示以外に質的用法、冗談用法、仮想的事態を示すなど、やや特殊な意味が存在することを確認した。また、発話状況からいくつかの事態P<sub>1</sub> P<sub>2</sub> P<sub>3</sub> …の中で一つの可能性を取り上るというプロセスは「かもしれない」と「Pたりして。」が同様であると考え、発話状況とP<sub>1</sub> P<sub>2</sub> P<sub>3</sub> …の関係、発話意図に基づき詳しく考察した。その結果、「Pたりして。」は極端な例の一つの可能性を表す可能性判断であり、冗談用法の「Pたりして。」は同様の可能性判断を話し手の戦略によって用いられる表現として考えられると主張した。さらに、「Pたりして。」の組成、文法形式の独立化、疑問・否定・丁寧形との接続関係、文末表現、語彙的表現、断定の緩和表現、モダリティ性を考察し、意味的には極端な例の一つの可能性を表し、形態的には疑問、否定、丁寧の形を取り得ない、認知的モダリティの一形式として考えられると主張した。

A Study of the Meaning of Sentence Ending “P-TARISITE”  
 — Focusing on Epistemic Modality —

Youm, Mi-ran

We examined the meaning of “TARISITE”, which appears to be a combination of Japanese parallel particles “TARI” and “SITE”, we particularly focused on “P-TARISITE” which is used alone at the end of sentences. We made attempts to position it semantically based on the modality point of view. Prior research, has confirmed that there are some special meanings such as qualitative usage, joke usage, and virtual situations other than the original meaning of some enumerations and implications. In addition, the process of selecting one possibility out of several situations P<sub>1</sub> P<sub>2</sub> P<sub>3</sub> ... from a speech situation indicates that “KAMOSIRENAI” and “P-TARISITE” are similar, and based on the relationship between the speech situation and P<sub>1</sub> P<sub>2</sub> P<sub>3</sub> ..., speech intention is considered in detail. The result, indicated that “P-TARISITE” is a possibility judgment that represents the possibility of extreme cases, and that “P-TARISITE” in joke usage can be considered an expression strategically used by the speaker for the same possibility judgment. In addition, we considered the composition of “P-TARISITE”, independence of grammatical form, connection relation with question/negative statement/polite form, sentence end expression, lexical expression, relaxed expression of predication, modality, and semantically extreme examples. Thus, “P-TARISITE” can be considered a form of epistemic modality that can not take the form of question, denial, or politeness in terms of formality.